

# 鷺鳥

幸田露伴

青空文庫



ガラーリ

格子こうしの開あく音がした。茶の間に居た細君さいくんは、誰だれかしらんと思  
つたらしく、つと立上たつて物の隙すきからちよつと窺うかがつたが、それが  
いつも今頃いまごろ帰るはずの夫むかだったと解わかると、すぐとそのままに出  
て、

「お帰りなさいまし。」

と、ぞんざいに挨拶あいさつして迎むかえた。ぞんざいというとは非難するよ  
うに聞えるが、そうではない、シネクネと身体からだにシナを付けて、  
語音れいぎに礼儀うるおの潤いを持たせて、奥様おくさまらしく気取きつて挨拶するよ  
うなことはこの細君の最大の不得手ふえてで、褒ほめて云いえば真率しんそつなので

ある。それもその道理で、夫は今でこそ若崎先生、とか何とか云われているものの、本は云わば職人で、その職人だった頃には一ト通りでは無い貧苦と戦つてきた幾年の間を浮世とやり合つて、よく搦手を守りおおさせたいわゆるオカミサンであつたのであるし、それに元来が古風実体な質で、身なり髪かたちも余りに気にせぬので、まだそれほどの年では無いが、もはや中婆アさんに見えかかつている位である。

「ア、帰つたよ。」

と夫が優しく答えたことなどは、いつの日にも無いことではあつたが、それでも夫は神経が敏くて、受けこたえにまめで、誰に対つても自然と愛想好く、日々家へ帰つて来る時立迎えると、こち

らでもあちらを見る、あちらでもこちらを見る、イヤ、何も互<sup>たが</sup>にワザと見るといふので無いが、自然と相見るその時に、夫の眼<sup>め</sup>の中に和<sup>やわ</sup>らかな心、「お前も平安、おれも平安、お互<sup>しあわ</sup>に仕合せだナア」と、それほど立入った細かい筋<sup>すじ</sup>路<sup>みち</sup>がある訳では無いが、何となく和<sup>わ</sup>楽<sup>らく</sup>の満足を示すようなものが見える。その別に取立て云うほどの何があるでも無い眼を見て、初めて夫がホントに帰って来たような気がし、そしてまた自分がこの人の家内<sup>かない</sup>であり、半身であると無意識的に感じると同時に、吾<sup>わ</sup>が身が夫の身のまわりに附<sup>つ</sup>いてまわって夫<sup>あつか</sup>を扱<sup>つか</sup>い、衣類<sup>いり</sup>を着<sup>き</sup>換<sup>か</sup>えさせてやったり、坐<sup>ざ</sup>を定めさせてやったり、何にかかにか自分の心を夫に添<sup>そ</sup>わせて働くようになる。それがこの数年の定<sup>じよう</sup>跡<sup>せき</sup>であった。

ところが今日きょうはどういうものであろう。その一ト眼ひとみが自分には全く与あたえられなかつた。夫はまるで自分というものの居ることを忘れはてているよう、夫は夫、わたしはわたしで、別々の世界に居るもののように見えた。物は失われてから真まの価あたいがわかる。今になつて毎日毎日の何でも無かつたその一ト眼ひとみが貴たつといものであつたことが悟さとられた。と、いうように何も明白めいぱくに順序立しらべてて自然しぜんに感じられるわけでは無いが、何かしら物苦ものくるしい淋さびしい不安ふあんなものが自分おのれに逼せまつて来るのを妻は感じた。それは、いつもの通りに、古代こくたいの人のような帽子ぼうし——というよりは冠かんむりを脱ぬぎ、天神てんじん様のよような服ふくを着換かえさせる間まにも、いかにも不機嫌ふきげんのよように、真面目まじめではあるが、勇いさみの無い、沈しずんだ、沈しずんで行きつつあるよような夫

の様子で、妻はそう感じたのであった。

永年ながねん連添つれそう間には、何家どこでも夫婦ふうふの間に晴天和風ばかりは無

い。夫が妻に対して随分ずいぶん強い不満を抱くいだことも有り、妻が夫に

対して口惜くやしい厭いやな思おもいをするいこともある。その最もはなはだ甚しい時に、

自分は悪い癖くせで、女だてらに、少しガサツなところの有る性しやうぶ

分ぶんか知らぬが、ツイ荒あらい物言ものごといもするが、夫はいよいよ怒おこると

なると、勘かん高たかい声で人の胸にささるような口をきくのも止やめて

しまつて、黙だまつて何も言わなくなり、こちらに對つて眼は開あいて

いても物を見ないかのようになる。それが今日きょうの今いまのような調ちやう

子合しあいだ。妙みょうなところに夫は坐すわり込こんだ。細工場さいくわば、それは土間に

なつているところと、居間とが續ついて居る、その居間の端はし、一段

低くなっている細工場を、横にしてそつちを見ながら坐つたのである。仕方がない、そこへ茶をもつて行つた。熱いもぬるいも知らぬような風に飲んだ。顔色かおいろが冴さえない、気が何かに粘ねばつている。自分に対して甚しく憎悪ぞうおでもしているかとちよつと感じたが、自分には何も心当りも無い。で、

「どうかなさいましたか。」

と訊きく。返辞へんじが無い。

「気色きしよくが悪いのじゃなくて。」

とまた訊くと、うるさいと云わぬばかりに、

「何とも無い。」

附つき穂ほが無いという返辞の仕方だ。何とも無いと云われても、



どうも何か有るに違ちがい無い。内うちの人の身分が好よくなり、交際こうさいが上つて来るにつけ、わたしが足らぬ、つり合い足らぬと他の人達に思われ云われはせぬかという女おんな氣なの案なじがなくも無いので、自分の事かしらんとまたちよつと疑うたぐつたが、どうもそうでも無いらしい。

定きまつて晚ばん酌しやくを取るといふのでもなく、もとより謹きん直ちよく、儉約けんやくの主人であり、自分も夫に酒を飲まれるようなことは嫌きらいなのではあるが、それでも少し飲むと賑にぎやかに機嫌きげん好よくなつて、罪も無く興おこじる主人である。そこで、

「晩には何か取りまして、ひさしぶりで一本あげましょうか。」と云つた。近來おおい大おに進歩しんぷして、細君はこの提議ていぎをしたのである。

ところが、

「なぜサ。」

と善良な夫は反問の言外に明らかにそんなことはせずとよいと否定ていしてしまった。是非ぜひも無い、簡素かんそな晩ばん食しょくは平常いっもの通りに済すまされたが、主人の様子は平常いっもの通りでは無かった。激げきしているのでも無く、怖おそれているのでも無いらしい。が、何かと談話だんわをしてその糸いと口ぐちを引出そうとしても、夫はうるさがるばかりであった。サア、まことの糟糠そうこうの妻たる夫思いの細君はついに堪こらえかねて、真正面から、

「あなたは今日はどうかなさったの。」  
と逼せまって訊いた。

「どうもしない。」

「だって。……わたしの事？」

「ナーニ。」

「それならお勤先の事？」

「ウウ、マアそうサ。」

「マアそうサなんて、変な仰り様ネ。どういうこと？」

「……………」

「辞職？」

と聞いたのは、吾が夫と中村という人とは他の教官達とは全く出で  
が異ちがつていて、肌合はだあいの職人風のところが引装ひきつくろわしてもどこ  
かで出る、それは学校なんぞというものとは映うつりの悪いことであ

る。それを仲の好い二人ふたりが笑つて話合つていた折々のあるのを知つていたからである。

「ナニニ。」

「免職めんしよく？ 御さとし免職おつてことが有るつてネ。もしか免職

なんていうんなら、わたしや聴ききやしない。あなたなんか、ヤイヤイ云われて貰もらわれたレツキとした堅かたぎ気のお嬢じようさんみたようなもので、それを免職と云えば無理離縁りえんのようなものですからネ。」

「誰も免職とも何とも云つてはいないよ。お先ツ走り！ うるさいネ。」

「そんならどうしたの？ 誰か高慢こうまんチキな意地悪と喧嘩けんかでもしたの。」

「イヤ。」

「そんなら……」

「うるさいね。」

「だって……」

「うるさいツ。」

「オヤ、けんどんですネ、人が一いっしょうけんめい生懸命きになつて訊きいてるのに。何でそんなに沈んでいるのです？」

「別に沈んじやいない。」

「イイエ、沈んでいます。かわいいそうに。何でそんなに。」

「かわいいそうに、は好かつたネ、ハハハハ。」

「人をはぐらかすものじゃありませんよ。ホン気になつてい

のを。サ、なんで、そんなに……。なんでですよ。」

「ひとりでに力なア。」

「マア！ 何も隠かくさなくつたツていいじゃありませんか。どうい  
う入りい訳わけなんですか聴かせて下さい。実はコレコレとネ。女だつ  
て、わたしあ、あなたの忠ちゆうしん臣しんじゃありませんか。」

忠臣という言葉は少し奇き異いに用いられたが、この人にしてはご  
もつともであつた。實際この主人の忠臣であるに疑ういたない。しか  
し主人の耳にも浄じようるり瑠璃るりなどに出る忠臣という語に連関して聞  
えたか、

「話セツて云つたつて、隠すのじゃ無いが、おんなわらべの知る  
事ならずサ。」

浄瑠璃の行われる西の人だったから、主人は偶然ぐうぜんに用いた語り物の言葉を用いたのだが、同じく西の人で、これを知っていたところの真率で善良で忠誠な細君はカツとなつて瞋いかつた。が、直じきにまた悲痛な顔になつて堪こらえ涙なみだをうるませた。自分の軽視されたということよりも、夫の胸うちの中に在るものが真に女わらべの知るには余るものであらうと感じて、なおさら心配に堪たえなくなつたのである。

格子戸は一つ格子戸である。しかし明ける音は人々で異なる。夫の明けた音は細君の耳には必ず夫の明けた音と聞えて、百にも一つも間違まちがうことは無い。それが今日は、夫の明けた音とは聞えず、ハテ誰が来たかというように聞えた。今その格子戸を明けるにつ

けて、細君はまた今更に物を思いながら外へ出た。まだ暮れたばかりの初夏しよかの谷中やなかの風は上野つづきだけに涼すずしく心よかつた。ごく懇意こんいでありまたごく近くである同じ谷中の夫の同僚どうりようの中村の家を訪とい、その細君に立話しをして、中村に吾家うちへ遊びに来てもらうことを請こうたのである。中村の細君は、何、あなた、ご心配になるようなことではございますまい、何でもかえつてお喜びになるような事がお有りのはずに、チラと承りました、しかし宅たくは必ず伺うかがわせますよう致いたしましょう、と請合うけあつてくれた。同じ立場に在る者は同じような感情を懐いだいて互によく理解し合うものであるから、中村の細君が一も二も無く若崎の細君の云う通りになつてくれたのであろうが、一つには平常いづも同じような身分の出と



いうところからごくごく両家が心安くし合い、また一つには若崎が多くは常に中村の原型によつてこれを鑄いることをする芸術上のきようだいぶん兄弟分きようだいぶんのような関係から、自然と離はなれ難がたき仲になつていた故もあつたらう。若崎の細さいくん君はいそいそとして歸つた。



顔も大きいからだが身体も大きくゆつたりとしてゐる上に、職人上りとは誰にも見せぬふさふさとした頤あごひげ鬚うわひげ上ほおひげ髭ほおひげ髯ほおひげを無遠慮ぶえんりよに生はやしているので、なかなか立派に見える中村が、客座にどつしりと構かまえて鷹揚おうようにまださほどは居ぬ蚊かを吾家うちから提さげた大き

な雅がな団扇うちわで緩ゆるく払はらいながら、逼せまらぬ気味きみ合あいで眼まのまわりに皺しわを  
 湛たえつつも、何か話はなすところは実じつに堂々どうどうとして、どうしても兄あ分な  
 である。そしてまたこの家やの主人しゅじんに対して先せん輩ぱいたる情愛じやうあいと貫かんろ  
 禄くとをもつて臨まんでいゝ綽しゃく々しやくしやくとして余裕よゆうある態度は、いか  
 にもこここの細君こさいきみをしてその来訪らいぼうを需もとめさせただけのことは有ある。  
 これに对应たいおうしている主人しゅじんは瘦やせ形がた小こづくりといふほどでも無いが  
 対手あいてが対手たいてだけに、まだ幅はばが足たらぬように見える。しかしよしや  
 大智だいち深智しんちでないまでも、相応さうおうに鋭すい智慧ちえ才覚さいかくが、恐おそろしい負けぬ  
 氣きを後うしろ盾たてにしてまめに働はたらき、どこかにコツツリとした、人ひと  
 は決して圧潰おしつぶされぬもののあることを思おもわせる。

客きやくは無雜むぞう作さくに、

「奥さん。トいう訳だけで、ほかに何があつたのでも無いのですから、まわり氣ぎの苦勞はなさらなくていいのですヨ。おめでたいことじゃありませんかね、ハハハ。」

と朗ほがらかに笑つた。ここの細君は今ももう暗雲を一いつそう掃されてしま

つて、そこは女だ、ただもう喜びと安心とを心配の代りに得て、

大風たいふうの吹ふいた後の心持で、主客の間の茶ちや盆ぼんの位置をちよつと

直しながら、軽かく頭かしらを下げて、

「イエもう、業わざの上の工夫くふうに惚ほげていたと解りますれば何のこと

もございました。ホントにこの人は今までに随分こんなこともご

ございましたツけ。」

と云つた。客と主人との間の話で、今日学校で主人が校長から命

ぜられた、それは一週間ばかり後に天子様が学校へご臨幸下さる、その折に主人が御前で製作をしてご覧に入れるよう、そしてその製品を直に、学校から献納し、お持帰りいただくということだったのが、解ったのであった。それで主人の真面目顔をしていたのは、その事に深く心を入れていたためで、別にほかに何かあったのでもない、と自然に分明したから、細君は憂を転じて喜と為し得た訳だったが、それも中村さんが、チヨクに遊びに来られたお蔭で分つたと、上機嫌になつたのであった。

女は上機嫌になると、とかくに下らない不必要なことを饒舌り出して、それが自分の才能でもあるような顔をするものだが、この細君は夫の厳しい教育を受けてか、その性分からか、幸にそ

ういうことは無い人であつた。純粋じゆんすいな感謝かんしゃの念こゝろの籠こもつたおじぎを一つボクリとして引退ひきざがつてしまった。主人はもつと早く引退つてもよかつたと思つていたらしく、客もまたあるいはそうなのか、細君が去つてしまふとかえつて二人は解放されたような様子になつた。

「君のところへ呼びよに行きはしなかつたかね。もしそうだったら勘弁かんべんしてくれたまえ。」

「ム。ハハハ。ナニ、ちようど、話しに来ようと思つていたのサ。」

主客の間にこんな挨拶が交されたが、客は大きな茶碗ちやわんの番茶をいかにもゆつくりと飲乾のみほす、その間主人の方を見ていたが、茶

碗を下へ置くと、

「君は今日最初辞退をしたネ。」

と軽く話し出した。

「エエ。」

と主人は答えた。

「なぜネ。」

「なぜツて。イヤだったからです。」

「御前へ出るのにイヤってことはあるまい。」

ホンの会話的の軽い非難だったが、答えは急遽せわしかつた。

「御前へ出るのにイヤの何のと、そんな勿体もったいないことは夢にも

思いません。だから校長に負けてしまいました。」

「ハハア、校長のいいつけがイヤだったのだネ。」

「そうです。だがもう私がすぐに負けてしまったのだから論はありません。」

「負けた負けたというのが変に聞えるよ。分らないネ。校長が別に無理なことを云ったとも私には思えないが。私も校長のいいつけで御前製作をして、面目めんぼくをほどこしたことのあるのは君も知っててくれるだろうに。」

と、少し面おもてをあげて鬚をしごいた。少し兄分ぶ振っているようにも見えた。しかし若崎の何か勘ちがいをした考かんがえを有っているらしい蒙もうを啓ひらいてやろうというような心切しんせつから出た言葉に添った態度だったのだ、いかにも教師くさくは見えだが、威張いばっているとは

見えなかつた。

若崎は話しの流れ方の勢いきおいで何だか自分が自分を弁護べんごしなければならぬようになったのを感じたが、貧乏神びんぼうがみに執念しゅうねく取憑とりつかれたあげくが死神にまで憑かれたと自ら思ったほどに浮世の苦酸くさんを嘗なめた男であつたから、そういう感じが起ると同時にドツコイと踏ふみとど止とどまることを知っているので、反撃はんげき的てきの言葉などを出すに至るべき無益と愚ぐとの一步手前で自ら省みた。

「や、あの鶏にわとりは実に見事に出来ましたネ。私もあの鶏のような作がきつと出来るというのなら、イヤも鉄砲てつぱうも有りはしなかつたのですがネ。」

と謙遜けんそんの布ぬのぶくろ袋ぶくろの中へ何もかも抛ほうり込んでしまふ態度を取り



にかかった。世の中は無事でさえあれば好いというのなら、これでよかつたのだ。しかし若崎のこの答は、どうしても、何か有るのを露わあたらすまいとしているのであると感ぜられずにはいない。

「きつと出来るよ。君の腕うでだからナ。」

と軽い言葉だ。善意の奨しょう励れいだ。赤剥あかむきに剥いて言えば、世間

に善意の奨励ほどウソのものは無い。悪意の非難がウソなら、善意の奨励もウソである。眞実は意の無いところに在る。若崎は徹てつてい

底してオダテとモツコには乗りたくないと言つてゐる。客

のこの言葉を聞くとブルツとするほど厭いやだつた。ウソにいじりまわされている芸術ほどケチなものはないと思つてゐるからである。で、思わず知らず鼻のさきで笑うような調子に、

「腕なんぞで、君、何が出来るかね。僕等ぼくらよりズツト偉い人えらだつて、腕なんかアテになるものじやあるまい。」

と云つた。何かが破裂はれつしたのだ。客はギクリとしたようだったが、さすがは老骨ろうこつだ。禅ぜん宗しゆうの味噌みそすり坊主ぼうずのいわゆる脊梁せきりようこ骨つを提起ていきした姿勢しせいになつて、

「そんな無茶なことを云い出しては人迷ひとまよわせだヨ。腕で無くつて何で芸術が出来る。まして君なぞ既すでにいい腕になつているのだもの、いよいよ腕を磨みがくべしだネ。」

戦鬪せんとうが開始されたようなものだ。

「イヤ腕を磨くべきはもとよりだが、腕で芸術が出来るものではない。芸術は出来るもので、こしらえるものでは無さそうだ。君

の方ではこしらえとおせるかも知れないが、僕の方や窯業ようぎようの

方の、火の芸術にたずさわるものは、おのずと、芸術は出来るものであると信じがちだ。火のはたらきは神秘靈奇しんぴれいきだ。その火のはたらきをくぐって僕等の芸術は出来る。それを何ということだ。

鑄金ちゆうきんの工作過程かていを実地にご覧に入れ、そして最後には出来上

つたものを美術として美術学校から献けんじよう上するという。そうう

まく行くべきものだから、どうだか。むかしも今も席画というがある、席画に美術を求めることの無理で愚ぐなのは今は誰みとしも認めて

いる。席上鑄金に美術を求める、そんな分らない校長ではないと

思っていたが、校長には校長の考えもあろうし、鑄金はたとい蠟ろう

型うがたにせよ純粹美術とは云い難いが、また校長には把掖誘導はえきゆうどう啓

いはつばつてき  
発拔擢、あらゆる恩を受けているので、実はイヤだナアと思  
つたけれども枉まげて従したがつた。この心持がせめて君には分つてもら  
いたいのだが……」

と、中頃は余り言いすぎしたと思つたので、末にはその意を濁にごし  
てしまった。言つたとて今更どうなることでも無いので、凶に乗  
つて少し饒舌しゃべり過ぎたと思つたのは疑いも無い。

中村は少し凹へこまされたかとも有るが、この人は、「肉の多きや  
刃やいばその骨ほねに及およばず」という身体からだつきの徳とくを持つている、これもな  
かなかの功こうを経ているものなので、若崎の言葉の中心にはかまわ  
ずに、やはり先輩ぶりの態度を崩くずさず、

「それで家うちへ帰かえつて不機嫌ふきげんだったというのなら、君はまだ若過わがぎ

るよ。議論みたようなことは、あれは新聞屋や雑誌屋ざっしやの手合にまかせておくサ。僕等は直接に芸術の中に居るのだから、堀へいの落らく書きなどに身を入れて見ることは無いよ。なるほど火の芸術と君は云うが、最後の鑄いるといふ一段だけが君の方は多いネ。ご覧に入れるには割が悪い。」

と打解けて同情し、場合によつたら助言でも助勢でもしてやろうという様子だ。

「イヤ割が悪いどころでは無い、熔ゆ金を入れるその時に勝負が着くのだからネ。機嫌ひどが甚ひどく悪いように見えたのは、どういふものだか、帰りの道で、吾家うちが見えるようになってフト気中きあたりがして、何だか今度の御前製作は見事に失敗するように思われ出して、そ

れで一倍鬱屈うつくつしたので。」

「氣アタリという奴やつは厭いやなものだネ。わたしも若い時分には時々そういうおぼえがあつたが。ナーニ必ず中るとばかりでも無いものだよ。今度の仏像ぶつぞうは御首みくしをしくじるなんと予感おおきして大にシヨゲていても、何のあやまちも無く仕上つて、かえつて褒めほられたことなんぞもありました。そう氣にすることも無いものサ。」  
と云いかけて、ちよつと考え、

「いったい、何を作ろうと思ひなすつたのか、まだ未定なのですか。」

と改たまつたように尋たずねた。

「それが奇妙きみょうで、学校の門を出るとすぐに題が心に浮んで、わ

ずかの道の中ですっかり姿が纏まりました。」

「何を……どんなものを。」

「鷺がちよう鳥を。二羽わの鷺鳥を。薄い平ひらめな土坡どばの上に、雄おすの方は高く首を昂あげてい、雌めすはその雄に向つて寄つて行こうとするところです。無論小さく、写生風しやせいふうに、鑄膚いはだで十二分に味を見せて、そして、思いきり伸のばした頸くびを、伸のばしきつた姿の見ゆるように随ず分いぶん細く」

と話すのを、こつちも芸術家だ、眼をふさいで瞑めい想そうしながら聴いていると、ありありとその姿が前に在るように見えた。そしてまだ話をきかぬ雌までも浮いて見えたので、

「雌の方の頸はちよいと一トウねりしてネ、そして後足の爪つめと踵かかと

とに一ト工夫がある。」

という、不思議にも言い中あてられたので、

「ハハハ、その通りその通り。」

と主人は爽さわやかに笑った。が、その笑声の終らぬ中うちに、客はフト氣中りがして、鷺鳥が鑄損いそんじられた場合を思った。デ、好い図ですね、と既に言おうとしたのを呑のんでしまった。

主人は、

「氣中りがしてもしなくても構いませんが、ただ心配なのは御前ですからな。せつかくご天覽あまみいただいているところで失敗しては堪たまりませんよ。と云つて火のわざですから、失敗せぬよう理詰りづめにはしますが、その時になつて土を割つてみない中は何とも分り



ません。何だか御前で失敗するような気がすると、居ても立つても居られません。」

中村は今現げんに自分にも変な気がしたのであつたから、主人に同情せずにはいられなくなつた。なるほど火の芸術は！ 一切芸術きよくちの極致は皆そうであろうが、明らかに火の芸術は腕ばかりではどうにもならぬ。そこへ天覧という大きなことがかぶさつて来ては！ そこへまた予感という妖あやしいことが湧わきあ上あつては！ 嗚あ呼あ、若崎が苦しむのも無理は無い。と思つた。が、この男はまだ芸術家になりきらぬ中、香具師やし一流のぞみの望まかに任せて、安直すばに素張すばらしい大仏を造つたことがある。それも製作技術の智慧からではあるが、丸太まるたを組み、割わり竹だけを編み、紙を貼はり、色を傳つけて、イン

チキ大仏のその眼の孔あなから安房上総あわかずさまで見ゆるほどなのを江戸えどに作つたことがある。そういう質たちの智慧のある人であるから、今ここにこにおいて行詰まるような意気地いくじ無しではなかつた。先輩として助言した。

「君、なるほど火の芸術は厄やつかい介だ。しかしここに道はある。どうです、鷺鳥だからむずかしいので。蟾ひきがえると改題してはどんなものでしょう。昔むかしから蟾蜍の鑄物は古い水すいてき滴などにもある。醜みにくいものだが、雅はあるものだ。あれなら熔ゆ金の断きれるおそれなどは少しも無くて済む。」

好意からの助言には相違無いが、若崎は侮ぶじよく辱よくされたように感じでもしたか、

「いやですナア蟾蜍は。やっぱり鷺鳥で苦みましようヨ。」  
と、悲しげにまた何だか怨みつぽく答えた。

「そんなに鷺鳥に貼くこともありますまい。」

「イヤ、君だつてそうでしょうが、題は自然に出て来るもので、それと定まつたら、もうわたしには棄てきれませぬ。逃げ道のために蝦蟇の術をつかうなんていう、忍術のようなことは私には出来ません。進み進んで、出来る、出来ない、成就不成就の紙一重の危い境に臨んで奮うのが芸術では無いでしょうか。」

「そりやそういえば確にそうだが、忍術だつて入卜用のものだから世に伊賀流も甲賀流もある。世間には忍術使いの美術家もなかなか多いよ。ハハハ。」

「御前製作ということできえ無ければ、少しも屈托くつたくは有りませんがナア。同じ火の芸術の人で陶工とうこうの愚齋ぐさいは、自分の作品を窯かまから取出す、火のための出来損じがもとより出来る、それは一々取つては抛なげ、取つては抛なげ、大地へたたきつけて微塵みじんにしたと聞いています。いい心持の話じやありませんか。」

「ムム、それで六兵衛ろくべえ一家いっかの基もとを成したというが、あるいはマアお話じや無いかネ。」

「ところが御前で敲たたき毀こわすようなものを作つてはなりません、是非とも氣の済すむようなものを作つてご覧をいただかねばなりません。それが果して成るか成らぬか。そこに脊骨せぼねが絞しぼられるような悩みなやが……」

「ト云うと天覧を仰ぐということが無理なことになるが、今更野暮を云つても何の役にも立たぬ。悩むがよいサ。苦むがよいサ。」と断崖から取つて投げたように言つて、中村は豪然として威張つた。

若崎は勃然として、

「知れたことサ。」

と見かえした。身体中に神経がピンと緊しく張つたでもあるように思われて、円味のあるキンキン声はその音でも有るかと思へた。しかしまたたちまちグツタリ沈んだ態に反つて、

「火はナア、……火はナア……」

と独り言つた。スルト中村は背を円くし頭を低くして近々と若崎

に向い、声も優しく細くして、

「火の芸術、火の芸術と君は云うがネ。何の芸術にだつて厄介なところはきつと有る。僕の木彫だつて難関は有る。せつかくだんだんと彫上げて行つて、もう少しで仕上になるといふ時、木の事だから木理がある、その木理のところへ小刀の力が加わる。木理によつて、薄いとところはホロリと欠けぬとは定まらぬ。たとえば矮鶏の尾羽の端が三分五分欠けたら何となる、鶏冠の蜂の二番目三番目が一分二分欠けたら何となる。もう繕いようもどうしようも無い、全く出来損じになる。材料も吟味し、木理も考え、小刀も利味を善くし、力加減も氣をつけ、何から何まで十二分に注意し、そして技の限りを尽して作をしても、木の理というも

のは一々に異<sup>ちが</sup>う、どんなところで思いのほかにはホロリと欠けぬものではない。君の熔<sup>ゆ</sup>金の廻りがどんなところで足る足らぬが出来るのも同じことである。万一異<sup>い</sup>なところから木理がハネて、釣<sup>つりあ</sup>合<sup>い</sup>を失えば、全体が失敗になる。御前でそういうことがあれば、何とも仕様は無いのだ。自分の不面目はもとより、貴人のご不興も恐多いことでは無いか。」

ここまで説かれて、若崎は言葉も出せなくなった。何の道にも苦<sup>くる</sup>みはある。なるほど木理は意外<sup>わざ</sup>の業<sup>わざ</sup>をする。それで古来木理の無いような、粘<sup>ねば</sup>りの多い材、白<sup>びやくだん</sup>檀<sup>だん</sup>、赤<sup>しやくだん</sup>檀<sup>だん</sup>の類<sup>ち</sup>を用いて彫<sup>ち</sup>刻<sup>く</sup>するが、また特に杉<sup>すぎひのき</sup>檜<sup>ひのき</sup>の類<sup>ちゆう</sup>、刀<sup>とう</sup>の進<sup>しん</sup>みの早<sup>はや</sup>いものを用<sup>よう</sup>いることもする。御前彫刻などには大<sup>たい</sup>抵<sup>てい</sup>刀<sup>とう</sup>の進<sup>しん</sup>み易<sup>やす</sup>いものを用

いて短時間に功を挙あげることとする。なるほど、火、火のみ云つて、火の芸術のみを難儀なんぎのもののように思っていたのは浅はかであつたと悟つた。

「なるほど。何の道にも苦しい瀬戸せとはある。有難い。お蔭で世界を広くしました。」

と心からしみじみ礼を云つて頭かしらをたたみ畳へすりつけた。中村なかつむらも悦よろこばしげに謝意を受けた。

「ところで若崎さん、御前細工というものは、こういう難儀なものなのに相違無いが、木彫その他の道において、御前細工に不首尾のあつたことはかつて無い。徳川とくがわ時代、諸大名しよだいみょうの御前で細工さいくご事ご覧に入れた際、一度でも何の某なにがしがあやまちをしてご不



興を蒙こうむったなどということはない。君はどう思う。

わかりますか。」

これには若崎はまた驚おどろかされた。

「一度もあやまちは無かった！」

「さればサ。功こうみよう名てから手柄をあらわして賞美を得た話は折々ある

が、失敗した談はかつて無い。」

自分は今天覧の場合の失敗を恐れて骨を削けずり腸わたしほを絞る思をして  
いるのである。それに何と昔からさような場合に一度のあやま  
ちも無かつたとは。

「ムーツ。」

と若崎は深い深い考に落ちた。心は光りの飛ぶごとくにあらゆる

道理の中を駈巡かけめぐったが、何をとらえることも出来無かった。ただわずかに人の真心——誠まことというものの一切に超ちようえつ越えつして靈れいり力よくあるものということを思い得て、

「一心の誠というものは、それほどまでに強いものでしょうかナア。」

と真顔になつて尋ねた。中村はニヤリと笑つた。

「誠はもとより尊たつとい。しかし準備もまた尊たつといよ。」

若崎には解釈出来なかつた。

「竜りゆうなら竜、虎とらなら虎の木彫とをする。殿様とのさま御前ごぜんに出いだ、鋸のこぎり、手ち斧ような、鑿のみ、小刀ようなを使つかつてだんだんとその形かたちを刻きざみ出いだす。次第しだいに形かたちがおよそ分明めいぶんになつて来る。その間には失敗しぱいは無ない。たとい有あつ

たにしても、何とでも作意を用いて、失敗の痕あとを無くすことが出来る。時刻が相応に移る。いかに物好きな殿にせよ長くご覧になっておられる間には退たいくつ屈する。そこで鱗うろこなら鱗、毛なら毛を彫つて、同じような刀法を繰くりかえ返す頃になって、殿にご休息をなさるよう申す。殿は一度お入りになってお茶など召させらるる。準備が尊いのはここで。かねて十分に作りおいたる竜なら竜、虎なら虎をそこに置き、前の彫りかけを隠かくしておく。殿復ふたびお出ましの時には、小刀を取つて、危あぶなげ気無きところを摩なずるように削り、小しょうようしようようの刀かた屑なくずを出し、やがて成就よしの由を申し、近々ご覧に入るのだ。何の思わぬあやまちなどが出来よう。ハハハ。すりかえの謀ぼうけい計である。君の鑄物などは最後は水みず桶おけの中で型の泥どろを

割つて像を出すのである。準備さえ水桶の中に致しておけば、容易しなんに至難しなんの作品でも現わすことが出来る。もとより同人の同作、いつわり、贋物がんぶつを現わすということでは無い。」

と低い声で細々こまこまと教えてくれた。若崎は啞然あぜんとして驚いた。徳川期にはなるほどすべてこういう調子の事が行われたのだなと曉さとつて、今更ながら世の清濁せいだくの上に思を馳はせて感悟かんごした。

「有難うございました。」

と慄ふるえた細い声で感謝した。

その夜若崎は、「もう失敗しても悔くいない。おれは昔の伶俐りこうも者ではない。おれは明治めいじの人間だ。明治の天子様は、たとえ若崎が今度失敗しても、畢竟ひっきようは認みとめて下さることを疑わない」

と、安心立命の一境地に立つて心中に叫んだ。

○

天皇は学校に臨幸あらせられた。予定のごとく若崎の芸術

をご覧あつた。最後に至つて若崎の鶯鳥は桶の水の中から現われた。残念にも雄の鶯鳥の頸は熔金のまわりが悪くて断れていた。

若崎は拝伏して泣いた。供奉諸官、及び学校諸員はもとより若崎のあの夜の心の叫びを知ろうようは無かつた。

しかし、天恩洪大で、かえつて芸術の奥には幽眇不測なものがあることをご諒知下された。正直な若崎はその後しばし

ば大なるご用命を蒙り、その道における名譽めいよを馳はするを得た。

(昭和十四年十二月)

# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 幸田露伴」筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第1刷発行

底本の親本：「露伴全集」岩波書店

入力：林 幸雄

校正：門田裕志

2002年12月5日作成

2004年7月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 鶯鳥

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>